

バルバドスの様子

住民は黒人。まず東洋人はいない。

公務員やホテル・レストランの身なりはきちんとしている。

タクシードライバーは、非常にラフスタイル。あんちゃんって感じ。

かつては、イギリス領。公用は英語。

島はそれほど大きくないが、人口多く、

日本で言えば、中堅都市ぐらいのサイズ。

地形はわりと平坦な島で、隆起さんご礁の島。

農地も含めて、ほぼ全面的に開発や開拓されている。

首都（ブリッジタウン）付近の都市化が進んでいる。

周辺から日中はおおくが通勤・通学しているようだ。

周辺はなだらかな丘陵地で農地と住宅が混在

ビーチリゾートが多い：ヨーロッパおよび北米より。クルーズ船も寄港。

小さい島なので、バスもふくめた車社会になっている。

国際空港あり：欧州や北米からの直行便多数。

海岸はリーフが広がり、浜辺も多い。

セントルシアの様子

バルバドスと似ているところが多いが、大きく違ったのは、

山岳地形なので、人口は多いが、

バルバドスよりは不便な感じで、自然が残っている感じがあった。

また地形に隔てられているため、バルバドスよりはそれぞれの地域性はあるそう。

政府が積極的にヘリテージツーリズムを進めている。

エコツーリズムの概念とほぼ同義である。

イギリスの影響

道路は左側通行。したがって日本から直輸入の日本車ばかり。

交差点少なく、ラウンドアバウト（ロータリー）スタイル多い。

住宅地にはハンプ（段差）をつくり、スピードを落とす工夫がある。

クリケット人気ある。

住宅はみなわりと似た様式（アメリカン?）。

玄関先はひさしが大きく、そこでくつろげる

食事

基本的には揚げ物主体で、

和食好きの日本人から見たらあまり美味しくはない。

トビウオが主体

フィッシュ&チップスなんかが定番。

ビールはバンクス。少し癖があるが軽い感じ。

インフラ整備

道路はほとんど舗装済。ただでこぼこはひどくはないが多い。

ハイウェイ制限 80KMで、定期的にラウンドアバウト（ロータリー）があり、一般道とつながっている。

ハイウェイは自動車専用のようなようではあるが、路肩に人が歩いている。

電柱は木性。

街頭はやや暗めだが、おおむねついている。

水道水はいちおう飲める。

植 生

小笠原で見られるものが結構ある。

モクマオウ・ギンネム・ホナガソウ・モモタマナ・オオハマボウ・

ガジュマル・インドゴムノキ・ホウオウボク・プルメリア・ブーゲンビレア・

ハイビスカスなど。

グレープフルーツの原産地

爬虫類

グリーンアノールのようなのがいた。

ヒアリングについて

コミュニティーに関するものが主で、環境や観光に関するものもあったが、それから感じたことは、

援助する側と受ける側の両方のヒアリングがあったので、意見の違いが浮き彫りになっていた。

援助する側の担当や責任者が、やや現場を把握していない感があった。

お互いの意見交換や交流が充分ではないのかもしれない。

都市化が進み、車社会になっているので、それぞれのエリアのしっかりとしたコミュニティーはないように感じた。

日本でいえば、すんでいる所の町内会程度の感じか。

コミュニティーへの支援をする場合、

まずその中へ、入り込んでいく、支援する側の人間の存在も重視されていた。

地域のキーパーソンの存在は非常に重視されている。

既存のリーダーがわりと用いられている。

地域のコミュニティーへの援助というよりはインタレストグループ（目的のはっきりしたグループ）への援助が効果があるようだ。

しっかりとした地域のコミュニティーの存在がないのだから、そうなるのは当たり前かもしれない。

また援助するほうとしては、目的がはっきりしたグループのほうが、住民からニーズを拾い上げるより、よっぽど手間が省けるのだろう。

合意形成の手段として、

イベントと子供への教育が効果的とされていた。

観光面では食関係のイベントが効果的なようだ。

政府の政策として、ソフトへの転換が図られている。

観光でも、共同体でも、地域の危機感も

合意形成や動き出す原動力になっているようだ。

個別ヒアリング事項

ハリソン：

わりと大規模な開発で、マスツーリズム的要素が強く、小笠原ではどうかなという感じ。
地域が十分理解し、納得していないものを感じた。
きっと、十分には住民の声を拾い上げていないのか、無視しているのだろう。

セントルシア：

小笠原向きなそれぞれが小規模な開発
歴史をテーマにしたほぼエコツリズムである。
地元以上に送迎会社にお金が落ちすぎ。
もう少し中身をなればさらによくなる。

ホテル：

小笠原は小規模業者なので、一業者では効果が出にくい。
この手の活動は何かのグループや団体でやらないとできにくい。
ただ、時代の流れで、みんなが取り組んでやっていくことは絶対必要。

ボーデン：

住民の活動に対して行政が支援する仕組みをうまく活用している。
小笠原のエコツリズムの推進には、
こういう仕組みが機能していくともっと進みやすいのではないだろうか。

サンデーハイク：

こういう活動は小笠原でももっと積極的にやるといいだろう。
フィールドでの活動は
参加した人が共通認識をもちやすくなるので、議論がしやすくなる。

小笠原に使えるなもの

住民からの意見を吸い上げて、援助していく仕組みや既存のグループへの援助や補助の強化をすすめる仕組み。

じっさいにはヒアリングではよくわかりませんでした。そういう仕組みがあるということは分かった。機能しているかもよくわからなかったが。

定期的あるいは一定期間、島に入り込む支援する側の人の存在。

役所もコンサルに委託をする場合、報告書で終わりではなく、その先の少しでも実施に関わるところまで委託して欲しい。そうしないと各種調査が生きてこない。

道路での、ロータリーやハンプの活用。

清瀬の交差点なんかはロータリー方式いけそう。

インフラ整備

内地と同じ使用ではなく、小笠原仕様があってもいいのでは。

住宅景観

全体的にやはり様式がにていると、調和があるように感じた。

危機感

これをうまくあおることが原動力になるということ。

以上